

日本グループ・ダイナミクス学会会報

JGDA

ぐるだいい

ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 39 号

(2011 年 8 月 5 日)

発行所： 〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎 6-19-1

九州大学大学院人間環境学研究院 人間科学部門心理学講座

山口裕幸研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人： 山口裕幸、 編集担当： 坂田桐子

《 目 次 》

§ 学会役員の改選・交代について…………… 1

★ 新会長の挨拶： 山口裕幸

★ 退任にあたって： 浦 光博

★ 2011-2012 年度役員選挙の経過と結果： 小西啓史

§ 学会大会の開催について…………… 5

★ 日本グループ・ダイナミクス学会第 58 回大会へのお誘い： 今城周造

§ 東日本大震災に関する会員の活動…………… 6

★ <報告> 東日本大震災における協働的实践： 渥美公秀

§ 国際学会大会参加報告…………… 8

★ The 12th European Congress of Psychology 参加報告： 山中咲耶

§ 事務局からのお知らせとお願い／広報担当からのお知らせ／諸連絡先 …… 8

★★ 学会役員の改選・交代について ★★

新会長の挨拶

山口裕幸（九州大学）

はじめに、東日本大震災による被害に遭われた皆様に、衷心よりお見舞い申し上げます。また、会員の皆様の中には、被災した現地での復旧、復興活動に力を尽くされた方も多いと存じます。その暖かく強い心と行動力に敬意を表します。

今年の 4 月から 2013 年の 3 月までの 2 年間、会長を務めさせていただくことになりました。本学会は半世紀以上にわたり、社会心理学を核としてわが国の関連諸科学の発展に貢献してきました。諸先達

の長きにわたるご尽力に深く感謝の念を覚えるととともに、これからも着実に活動を継続していかなければならないと身の引き締まる思いです。

学会はそれを構成する会員皆のものです。会員にとって本学会の存在意義はどんなところにあるのかをよく見極めた運営こそが必要とされます。会員が学会に求める重要な活動の基本的なものは、着実に機関誌を刊行し、年次大会を開催することにあると思います。自己研究を発表し、同じ関心を抱く研究者たちと相互作用して研究発展の刺激を得る場として、この二つは何よりも重要なものです。地味な取り組みであり、当たり前過ぎるとのご意見もあろうかと思いますが、近年の本学会を取り巻く状況は、こうした基本的な活動さえも十全に完遂することを難しくしてしまっています。今一度、基本に立ち返り、学会の基盤をなすこの二つの活動を充実させることを、今期の最重要課題として取り組んでいこうと考えています。

幸いにして機関誌「実験社会心理学研究」は、会員の皆様からの積極的な投稿と、献身的な査読のご協力を得て、創刊から半世紀を超え、今年は第 52 巻へと、順調に刊行されてきました。これまでに優れた論文を多数掲載して来ましたが、過去の巻号に掲載された論文の電子アーカイブ化によって、より広く読まれる機会を拡充しました。今後も論文審査の効率化をさらに進めて、より信頼され期待される機関誌に充実させていくことに取り組みます。

もうひとつは、年次大会の着実な開催です。ご存じのように、近年、わが国の大学教員や研究者は、いずこも繁忙を極め、時間や労力にゆとりのない状態にあります。当然の帰結として、学会大会の開催をお引き受けいただくことが大変困難な状況にあります。それでも、年次大会開催は、学会として、なんとしても継続していくべき活動です。専門の業者に事務委託しサポートする態勢を整えてきていますが、お引き受けいただいた先生方と機関にできるだけご負担をおかけしなくてすむように、さらに工夫を凝らしていこうと考えております。

この他、アジア社会心理学会との連携を軸にした国際化の推進、ならびに若手研究者の研究支援活動も継続して参ります。これらはすでに本学会の基軸をなす活動になっており、本学会の会員にとってよりメリットのあるものとなるように、改善すべき点を検討しながら、前に進めていきたいと存じます。気まぐれと言ってもいいほどに予測不可能で大きな変化が襲ってくる社会にあって、その変動に流されることのないように、本学会のプレゼンスを確乎たるものにしていくことを大切なミッションとして 2 年間取り組んで参ります。皆様のご理解とお力添えを、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

退任にあたって

浦 光博（広島大学）

会長をお引き受けしてからの 2 年間はあっという間でした。この間、理事、常任理事ならびに会員の皆様のご協力により、いくつかの仕事を行うことができました。まず、J-STAGE での電子アーカイブ化を完了することができました。この事業は、前任者の吉田俊和先生のもとで決定していたものであり、私どもの執行部にはそれを具体的に実現することが求められていました。著作権や個人情報保護の問題もあって作業は難航しましたが、なんとか完了まで漕ぎ着けることができました。関係各位のご尽力に感謝申し上げます。

また、学会の資金の会員への還元にも取り組みました。まず、年会費の値下げを実現することができました。さらには、国際化支援金制度を創設することもできました。いずれも、本学会が健全にして安定的な財政基盤を持つが故に実現できたことです。これはひとえに会員の皆様のご協力と歴代役員のご

尽力があつてこそのことだと感謝しています。

これらの一方で、実現できないままになってしまったことも少なくありません。中でも年次大会の開催校がなかなか決まらないことは、重大な問題であると認識しています。年次学会の開催は学会誌の刊行とともに学会の最も重要な事業です。にもかかわらずこの開催校の決定に毎年のように苦慮するという状況が続いています。執行部の力不足のせいであるとの批判は甘んじて受けますが、その一方で会員の皆様にも御自身の問題として受け止めていただき、是非とも前向きのご配慮と積極的な議論をお願いしたいと存じます。

また、アジア社会心理学会との連携のあり方にも考慮すべき点が残されました。両学会の協力体制そのものは、AJSP の順調な刊行という形で実を結んでいます。その一方で、名簿やメーリングリストの整理などにおける細々とした不整合は未解決のままです。歴代の執行部においてはいずれもかなりの努力を重ねて来ているところですが、相手のあることでもあり思うように改善は進んでいません。この点については、新たな執行部にご負担をおかけすることになり、また会員の皆様にもご不便をおかけすることになり申し訳なく思っております。今しばらくのご辛抱をいただければ幸いです。

さらに、国際化支援金制度を設けたものの、開始以来利用実績が1件にとどまっている（平成22年度末現在）ことも指摘しておかなければなりません。これが、制度の使い勝手の悪さ故のことであるとすれば、さほど大きな問題ではないと言えるかもしれません。しかし、会員の研究の国際化への志向性の低さが原因であるとすれば、それは学会（さらには学界）の長期的な発展にとって看過できない問題であるように思います。アジア社会心理学会の大会を始め多くの国際学会の大会で、本学会員の発表を多数見かけます。その数に比して、AJSP だけでなく他の国際誌への掲載論文もあまりにも少ないように思います。学会の国際化にとどまるのではなく、学会員の研究の国際化に向けて実効性のある取り組みが必要だと感じています。

これらの問題への取り組みは新たな執行部をお願いすることになります。しかし、改めて申し上げるまでもなく、会員の皆様のご協力なくして学会の円滑な運営はありえません。新たな執行部のリーダーシップと会員の皆様からのより一層のご支援によって、本学会がさらなる発展を遂げることを期待しております。

2011・2012 年度役員選挙の経過と結果

選挙管理委員会委員長 小西啓史（武蔵野大学）

選挙管理会： 小西啓史（委員長）、佐久間勲、道家瑠見子

選挙管理会事務局： 相川 充（常任理事）

(1) 会長、理事、監事選挙

選挙方法及び期間：全会員を対象に郵送投票、2010 年 11 月 12 日～12 月 6 日

開票：2010 年 12 月 11 日、武蔵野大学人間関係学部、小西研究室

作業者：選挙管理会員（小西啓史、相川 充、佐久間勲、道家瑠見子）

投票総数 200、有効投票 190

無効投票 10（内封筒なし 4、選挙台帳に名前のない者 3、封筒に名前のない者 3）

以下のとおり、選出された。

[会長] 山口裕幸

[全国区理事] (アルファベット順) (* : 40 歳未満枠)

渥美公秀、日比野愛子*、石盛真徳*、元吉忠寛*、村上史朗*、諏訪晃一*、高井次郎、
八ッ塚一郎、結城雅樹

[地方区理事]

(北海道) 栗林克匡、(東北) 作道信介、(関東) 相川 充、沼崎 誠、(中部) 橋本 剛、
(近畿) 三浦麻子、永田素彦、(中国四国) 坂田桐子、(九州) 池田 浩、(沖縄) 当選者なし

[監査] 外山みどり、浦 光博

(2)会長指名理事信任投票

方法及び期間：選出理事 18 名によるメール投票、2011 年 1 月 13 日～1 月 16 日

以下の 2 名が 18 名より信任された。

角山 剛、釘原直樹

(3)常任理事選挙

選挙方法及び期間：会長を除く理事 20 名による郵送投票、2011 年 1 月 17 日～1 月 26 日

開票：2011 年 1 月 28 日午後 3 時～3 時 30 分、武蔵野大学人間関係学部、小西研究室

作業：選挙管理会委員長、小西啓史、選挙管理事務局、相川充

投票結果 (4 名連記)

有権者数 20、投票者数 19、有効投票 76、無効投票 0

[常任理事] (アルファベット順)

沼崎 誠、坂田桐子、高井次郎、結城雅樹

(4)会長指名常任理事信任投票

方法及び期間：会長を除く理事 20 名によるメール投票、2011 年 1 月 31 日～2 月 3 日

投票結果

有権者数 20、投票者数 19

以下の 2 名が信任された。

渥美公秀、池田 浩

★★ 学会大会の開催について ★★

日本グループ・ダイナミックス学会第 58 回大会へのお誘い

大会委員長 今城周造(昭和女子大学)

昭和女子大学で開催される第 58 回大会まで約 1 カ月となり、そろそろ皆様のお手元に、プログラムと発表論文集が届いているところかと存じます。発表数を見ていただきますと、ロング・スピーチとショート・スピーチは昨年とほぼ同数ですが、ポスター発表は残念ながら 10 件以上減りました。これはやはり、東日本大震災の影響が小さくないと思われます。しかし、大地震の約 1 カ月後が発表登録締め切りだったにもかかわらず、被災地の会員の方からも研究発表が寄せられています。また、東日本大震災に関する発表やワークショップもいち早く予定されており、会員の皆様の敏速な行動力に頭の下がる思いがいたしました。今大会が、震災後の日本の姿を模索するひとつの機会になればと強く念じているところです。

会場の昭和女子大学は、東急田園都市線で渋谷から 2 駅目の「三軒茶屋」で下車し、高速道路(首都高 3 号)を見上げながら渋谷方面へ 7 分ほど歩くと、その正門が見えてきます。正門に入ると、左手に人見記念講堂があり、トルストイ像が来学者を迎えます(写真)。発表会場となる大学 1 号館は、この写真の右手奥に位置します。もちろん冷房完備なのですが、この夏は節電の影響で、「暑い」とのご苦情をいただくかもしれないと懸念しております。そうならないように手配はいたしますが、今般のやむを得ない事情を斟酌していただけますようお願い申し上げます。

本学では、やっと前期の試験も終わり、夏休みに入ろうとしています。会場の準備はこれからが本番ですが、ゼミの 3 年生や院生に「うちの大学でこの夏休みにグルダイの大会をやるんだけど、手伝ってくれませんか」と声をかけましたら、たいへん乗り気で目を輝かせておりました。学会の空気に触れ、また学会誌や書物を通じて存じ上げている研究者の皆様にお目にかかれることは、彼女たちにとって大事件のようです。とは言え、学生も私たち大会準備委員も、学会開催には不慣れでございしますので、行き届かない点多々あるかとは存じますが、実り多い大会になりますよう、出来る限りの準備をして参ります。8 月 23 日と 24 日の大会当日、多くの会員の皆様と昭和女子大学の会場でお目にかかれまことを、学生スタッフ・大会準備委員一同、心から楽しみにしております。



<人見記念講堂>

★★ 東日本大震災に関する会員の活動 ★★

＜報告＞東日本大震災における協働的实践

渥美公秀（大阪大学）

この度の震災で被害に遭われた皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。また、多くの学会員の皆様が、被災地と関わって、ご研究を推進されていることに心より敬意を表します。ここでは、私が行って参りました協働的实践の一端をご報告します。

地震の第一報は、在外研究先の UCLA で聞きました。その日のうちに、日本に向かいました。関西空港から、現在私が理事長を務めております特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD：兵庫県西宮市）の事務所に行きました。事務所で、矢守克也氏(本学会会員)をはじめとする理事の方々と協議しました。阪神・淡路大震災を契機として設立された災害 NPO として、被災された方々を中心に据え、できる限りの救援活動を行うこと、救援から復興まで 10 年 20 年と、活動を継続することを団体の方針としました。数日後、研究仲間（矢守氏、永田素彦氏、八ッ塚一郎氏、いずれも本学会会員）と一緒に、被災地に向かいました。また、避難者を受け入れている地域(新潟県小千谷市・刈羽村)も訪問しました。以来、NVNAD では、被災者支援、避難者支援、後方支援という 3 つのプロジェクトを進めてきました。本稿では、被災者支援プロジェクトの経緯を簡単に紹介します。その上で、私が、これらのプロジェクトを通して行ってきたことを協働的实践として位置づけます。

被災者支援プロジェクト～「北から」

岩手県九戸郡野田村で、復興支援活動を視野に入れて、救援活動を展開しています。当初、多くの災害 NPO が南から支援を展開しておられましたので、NVNAD では、被災地北部に取り残される被災地があつてはならないとの考えを抱き、青森から被災地に入りました。青森から入っていったのには、他にも理由がありました。まず、作道信介氏や日比野愛子氏(本学会会員)が弘前大学におられたからです。いずれアクションリサーチが始まれば、協働していけると考えました。次に、西宮市にある団体としての事情もありました。実は、阪神・淡路大震災後の夏休みに西宮市の子どもたちを招待し、遊ばせてくださったのが青森県八戸市の方々でした。その当時招待された子どもが今や成人し、NVNAD 事務所に語ってくれた八戸への感謝の気持ちがきっかけとなり、まず八戸市に行きました。久慈市を経由して南下し、役場を含む中心街が甚大な被害を受けた野田村と出会いました。

野田村は、人口 4,632 人の村でしたが、津波によって街の中心部が流され、役場をはじめとする公的機関も倒壊したり、浸水したりするという甚大な被害を受けました。村内では、37 名もの犠牲があり、全壊家屋だけでも 300 棟以上にのぼりました。流失した保育園の園児が、保育士さんのご尽力で、全員避難できたことは、救いでした。

まだ搜索活動が続いている頃、NVNAD では、西宮から片道 18 時間のボランティアバスを運行し、現地での活動を開始しました。私の役目は、バスが到着するまでに、現地に行って、現地災害ボランティアセンター、役場・地元の方々と活動の調整をすること、バスを迎えること、活動に参加すること、活動の安全を確保すること、反省会でボランティアさんの声を聴くこと、バスを送り出すこと、現地に残り、災害ボランティアセンターなどお世話になったところへ挨拶に行つて次の活動へと調整を開始する

ことなどです。また、野田村でまちづくりを行ってきた方々や、各地から救援活動に参加されている方々と、復興への展望を話し合うことも大きな役割の1つです。

野田村では、青森県八戸市や弘前市から参加されているボランティア団体とも交流が生まれました。現在は、八戸市、弘前市の諸団体や全国の個人ボランティアの皆さんと一緒に「チーム北リアス」というネットワークを組んで、共同して活動しています。具体的には、野田村の仮設住宅での支援活動と、復興に向けた議論の場作りに動いています。前者は、戸別訪問や、炊き出し・物資配布などのイベントを通じて、仮設住宅にお住まいの方々と対話を重ねて行く活動です。後者は、野田村の住民の方のご厚意で「チーム北リアス」の現地事務所を村内に建設し、そこに学生ボランティアや住民が集まって、村の復興について議論できる場を作っていく活動です。（活動の現状や詳細は、NVNAD のブログ <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/544> をご参照頂ければ幸いです）。

協働的实践から始まる

グループ・ダイナミックスは、アクションリサーチという研究姿勢をもった人間科学です。アクションリサーチは、当事者と研究者が、「事態をこんな風に改善したい」という思いを共有しながら、共同していく研究であり、そういう研究を目指す姿勢のことです。アクションリサーチには、まず現場における協働的实践が必要です。協働的实践は、当事者と非当事者が一緒になってより良い事態を目指して行う実践です。協働的实践では、さしあたって何を研究しようとしているのか、何が研究成果として生じうるのかといったことは明示することなく実践が先行します。

私自身が、これまで NVNAD を通じて行ってきたことは、被災地における様々な方々との協働的实践です。具体的には、泥かきであることもあれば、炊き出しをすることもあります。また、仮設住宅にお伺いして話を聞かせていただくこともあります。先日は、仮設住宅の皆さんと花の寄せ植えを行いました。当然ながら、その間に何も考えていないわけではありません。協働的实践では、アブダクションという推論過程を繰り返します。例えば、協働的实践を通して様々な事柄を観察していると、 $P \rightarrow Q$ という命題が見えてきます。それが、予想外であったり、一見不可解であったりして、驚きを伴うと、より興味が湧いてきます。一方、私たちは、日々の研究を通して、実に多様な知に触れているはずですが、その中から、 $S \rightarrow Q$ という知があったことに思い至ります。そこから、 $P=S$ を推論するのがアブダクションです。これは可謬性の高い推論ですが、演繹や帰納にはない発見の喜びがある現場に強い推論です。東日本大震災の現場で、現在、私がしていることは、 $P \rightarrow Q$ という命題へと整理されるであろう事柄を集めることです。具体的には、様々な場面において、被災された方々の声に耳を傾けることです。

現場で話を聴くというと、やれインタビューだ、半構造化面接だという風に考えられるのかもしれませんが。また、日々の記録の話をすると、やれソフトウェアがどうだ、質的な分析法だという風なことになるのかもしれませんが。しかし、現場で行っていることは、そういうことではありません。現場では、まず、挨拶をはじめ、被災地の方々と向き合い、対話することが最も大切です。基本的には、いわゆる”その場の空気を読んで”行動することだと言えましょう。被災者は、まさか研究対象ではないのですから。

そんな素朴経験主義を掲げて現場に関わっても、記述の山ができるだけで研究にはならないという批判もあるかと思います。しかし、些末な”理論”から浮き世離れした”仮説”を導いて、データ収集を行い、現地の人に響かない言説を紡ぎ出したりする方が、現場にとって、よほど迷惑だと思います。私たちに必要なのは、当事者と一緒に現場の変革を目指す姿勢（アクションリサーチ）だと思います。そこから、現状への批判的な視点を確保し、100 年を見据えた構想力をもった言説を吐いていくことが責務だと思います。

います。だとすれば、今、東日本大震災の現場で行うことは、協働的实践であると私には思えます。この日本で起こっていることに、何ら関係を持たないようなグループ・ダイナミックスであって欲しくないという思いがあるからです。

★★ 国際学会大会参加報告 ★★

The 12th European Congress of Psychology 参加報告

山中咲耶（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

2011年7月、イスタンブールで開催されたヨーロッパ心理学会に参加させていただきました。街中に威風堂々と建つモスクの前でオスマン帝国へと思いを馳せ、そうかと思えば、クラクションを鳴らして走り回る黄色いタクシーと救急車のサイレンとで耳が痛くなる。しかし、少し坂を上がって、背の高い建物の屋上に行けば、ミナレットの影がイスラムチックな街並みと、ゆったりと船が行き交うボスフォラス海峡が、とても穏やかで美しい。このような情緒あふれる街での大会となりました。

今回私は、プレッシャー状況下でパフォーマンスが悪化する基礎的なメカニズムについて、発表を行いました。国際学会では、日本以上に実験による心理学研究が、多く実施・発表されている印象があり、実験やパフォーマンスを主に研究対象としている身としては、良い刺激になりました。さらに、今回のように、多くの心理学領域が一斉に研究発表を行う学会では、普段馴染みがない領域へ知見を広げることが可能であり、また、他領域を専門とする研究者から意見を伺えるという点で、非常に貴重な機会であったと思います。実際に、ポスター発表ではプレッシャー研究に対して、発達的な観点から意見を頂くことができ、大変参考になりました（しかし、その一方で、せっかく質問をしていただいても、十分に返答しきれなかった場面もあり、英語力強化の必要性を痛感しました）。多くの方向から幅広い視野をもって研究を眺めるという経験は、今後、研究を進める上で生かしていきたいです。

さて、今回の渡航では、もちろん研究発表も貴重な経験でしたが、西洋とも東洋とも言い難い異国の地を体験できたという点でも、貴重な経験になりました。まず、何と言っても現地の方々の視線の強烈さと重厚な顔つきは非常に印象的で、この国では「草食系」などという言葉は存在しないに違いないと確信するほどでした。さらに、彼らはとても人懐っこく、道を歩いていると、こちらが聞いてもいないのに頻りに絨毯屋を紹介してくれます。親日的なのか、それとも単に何かを売りつけたいだけなのか疑問を抱きすぎ、疑心暗鬼になった日もありました。しかし、今となれば、現地の人々との関わりは非常に楽しく、イスタンブールの街をより魅力的に印象付けてくれたように感じます。以上のように、学会参加のみならず、異文化を体験できたという点でも、刺激的な学会でした。

★★ 事務局からのお知らせとお願い ★★

◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集

「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文3編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（A4版1－2枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細については、

学会ホームページに掲載してあります。

URLは、http://www.groupdynamics.gr.jp/journal/event_info.html です。ご参照ください。

なお、「実験社会心理学的研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

◆実験社会心理学的研究の書評候補募集

事務局では、実験社会心理学的研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

★★ 広報担当からのお知らせ ★★

◆ JGDA_Flash

グルダイでは【日本グループ・ダイナミックス学会 広報（速報）メールマガジン】（JGDA_Flash）を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員みなさまに e-mail でお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約 600 名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思います。登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、以下のアドレスのグルダイ広報メールマガジン運営担当マスターにお願いいたします。

office@groupdynamics.gr.jp

◆会員の皆様がお書きになった新著を、400 字程度でご推薦いただき、上記までメールにて随時ご送付いただきたいと思います。なお、ご推薦の文書はなるべく著者でない方に書いていただき、ご著書に関する出版社等の情報とともに、その推薦の方のお名前とご所属などもお書きくださいますようお願いいたします。これまでに掲載された記事は以下の WEB で閲覧できます。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/bookreview/index.html>

◆研究会案内等についてのニュース記事の掲載希望も大歓迎で受け付けています。上記のアドレスまでお送りください。なお、これまでに配信された Flash は、以下の WEB で閲覧可能です。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs2.cgi>

★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、本年度から、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局（担当：中山・糸魚川）
 〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
 中西印刷株式会社 学会部内
 TEL:075-415-3661 FAX:075-415-3662
 E-mail:jgda@nacos.com
 URL: <http://www.groupdynamics.gr.jp/>

◆学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
 〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1
 福岡大学人文学部文化学科 池田浩 研究室
 E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連

【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局（担当：田中裕史）
 〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
 中西印刷(株)内
 電話：075-441-3155 FAX：075-417-2050
 E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp
 URL: <http://www.groupdynamics.gr.jp/>

【編集委員長】

沼崎 誠
 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1
 首都大学東京 人文科学研究科
 E-mail : numazaki@tmu.ac.jp

◆広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報など】

広島大学大学院総合科学研究科 坂田桐子研究室
 〒730-8521 東広島市鏡山 1-7-1
 TEL: 082-424-6577
 E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。
 また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

<編集後記>「ぐるだいニュース」の記念すべき第0号が発刊されたのは、今から19年前の1992年の

こと。当時の編集担当は黒川正流先生（現在は名誉会員）でした。私は博士課程後期の学生で、編集をお手伝いしていました。当時は葉書等で送られてきた記事をワープロ打ちして印刷所で印刷し、紙媒体で会員の皆さんに郵送していたことを思い出しました。その時代に比べると、編集も発行も本当に便利な時代になったものです。「これだけ便利なのに手を抜くな」と皆さんからお叱りを受けないよう、努力したいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。（編集子）